

桂市長の独自判断で消防隊員を派遣

都市構造の違いによる消防体制の違いが判明

ま発生翌日の18日に市長の決断で派遣に踏み切りました。

—— 現地の様子はどうでしたか

岡 ヘリコプターは午前11時前に出発、救助隊員は千歳から飛行機で伊丹空港まで行き、レンタカーで現地に入りました。道路が渋滞し、現地に到着したのは午後11時を回っていました。そして19日から早速、作業を開始したわけです。

災害現場は広範囲にわたっており、とりあえず東灘区で倒壊したビルのガレキの下から市民の救出に当たりました。削岩機を使いコンクリートに穴を開けながらの作業ですが、7階建てのビルの2、3階部分が完全につぶれており、果たして中に生存者がいるのかどうか確認が難しい。わずかの隙間に胃カメラのようなファイバースコープを入れて行うという命がけの作業でした。結果としては5日間で5人の方を救出したのですが、残念ながら全員亡くなっていました。

作業は朝7時から夜は10時半ごろまで続きました。遺族の方もいますし、暗くなったから作業を中止するわけにもいきません。現場は暖房もなく、水や食料もありません。隊員は車の中で仮眠を取り、牛乳やパンといった粗末な食事でのぐ、大変な作業でした。

—— 阪神大震災は行政機関の初動体制がとかくマスコミの批判を浴びていますが、現地の防災上の問題点で感じられたことは

岡 地震の直後は大変だったと思います。果たして迅速に行動できる状況だったのか。消防だけを考えますと、我々は常に24時間体制で張り付いていますので、直ちに行動開始をしているわけですが、その際、どんなトラブルが起きたのかという問題があります。例えば、消防車の車庫のシャッターが開かなかったとか。いずれにしろ3つの消防署が被害を受けています。

また、神戸は道幅が狭く、建物や両側の民家の塀、電柱が倒れていたりと、とても通れる状態ではなかったということです。その点、札幌は道幅も広く恵まれています。

また、神戸市の消防車はポンプ車を中心なんです。札幌はタンク車を中心で、タンク車が2,500ℓの水を積んでいますから、消火栓や貯水槽がなくても対応できます。しかし、ポンプ車は水を積んでいないので消火栓か貯水槽に付かない限り水を汲み揚げられません。道幅が狭い上、倒壊した建物の下敷きになって貯水槽が利用できなかったなど悪条件が重なったようです。

北海道は落雪対策上、隣接する建



▲消防局庁舎

物の間隔を十分確保しており、モルタル壁など防火構造になっているので、窓から火が噴いても2-3mの間隔があれば、そう簡単には延焼しません。神戸のように重たい屋根の構造になっていませんし、壁が丈夫で基礎も深いことを考えると、同じ規模の地震に見舞われても神戸ほど建物が崩壊するとは考えにくい。隊員の報告を聞いて、そう感じています。

—— 当時の火災は尋常ではありませんでしたが、ヘリコプターによる空中消火活動は出来なかったのでしょうか

岡 ヘリによる消火活動は林野火災の場合であれば、付着する性質のある消火薬剤を散布して延焼を食

い止めるのに有効ですが、市街地での建物火災の場合、屋根があるため、いわば雨を降らせるようなものです。しかし、雨が降っても建物の中に水が入らないのと同じで、いくら散布しても効果が全くありません。

まして今回のような大規模火災になると、上空は大変な熱気でしょうから、低空飛行では危険を伴うので、現段階では難しいのです。

—— 火災現場の周辺にその薬剤を散布してはどうでしょうか

岡 火災というのは、建物のコンクリート壁ではなく内部の可燃物が燃えるわけですから、現実的には難しいと思います。

—— 瓦礫の下に生存者がいるの



インタビュー

札幌市消防局消防正監

岡 明 男 氏

阪神大震災では札幌市消防局も救助隊員、消防航空隊を現地に派遣した。神戸と札幌は都市構造に大きな違いがあり、にわかには比較はできないが、現地で学んだ教訓を通じて、防災体制の問題点などを岡明男消防正監に伺った。

隊員の食料はパンと牛乳、仮眠は車の中

—— 今回の阪神大震災で札幌市は直ちに救援隊を神戸に派遣しましたが、これまでに何人が派遣されたのですか

岡 陸上部隊第1陣の11人が現場で5日間作業を行い、次に10人を4日間派遣しました。ヘリコプターの消防航空隊は7人編成で18日から

28日まで現地で医薬品、食料などの搬送が中心でした。いまは全員が引き揚げています。

派遣は国から道、道から市町村への要請という手順を踏みますが、現場が混乱していたこともあって連絡も十分に取れずに時間ばかりが経過します。国からの要請もないま

に火の手が上がり救出できないのは残酷な話ですね

岡 酷な話ですが、あのような状況下では、どちらか一方を選択せざるを得ません。助けるといっても人手も時間もかかるが、火は水さえあれば消火できます。

したがって、家族にとっては辛いでしょうが、瓦礫の下で人のうめき声が聞こえても、火災が発生している場合は、心を鬼にして消火活動を優先しなければならないのです。

—— 現地では、消防隊員が救助作業を終えたのに、自衛隊員が同じところを掘り返すというケースもあったようですね

岡 過去に経験したことのない大震災で、極度の混乱状態の中にありますから、恐らく十分な指示体制が確立できないままに動き出してしまったのが原因でしょう。それだけに現場の責任者の苦労は並大抵ではありません。連日の不眠不休で、ある消防署長は血を吐いて倒れたと聞いています。

—— 札幌市で地震が起きた場合の防災体制は

岡 震度5の場合、直ちに災害対策本部を設置、全組織をあげて対処します。今回の災害で得られた教訓ですが、被害が大きくなるのは火災などの2次災害なんです。これに最

大の力を注ぐことが我々の第1のスタンスです。いろんな仕事がありますが、目先のことより、その先に大きくなならないよう抑えるのが第1条件なんです。最初の火は小さいわけですから、被害をそれ以上拡大させない、小さいうちに消してしまうこと。幸い、札幌は大半がタンク車ですから、小さければタンク車一台の水があれば鎮火させることができます。

大小合わせて年間平均で1件当たり15,000ℓ程度です。1台のタンク車で2,500ℓの水を積んでいるので、2台も出動すれば普通の住宅火災に対応できます。

—— 神戸もタンク車の充実が必要なのは

岡 3-4mの狭い道路ではタンク車は走れないので、ポンプ車を中心に整備しているのではないのでしょうか。

—— 札幌市内の消火栓の整備状況はどうなっていますか

岡 消防水利14,750のうち消火栓は14,051、防火貯水槽613、その他は井戸、池等です。

ふだんは消火栓で十分クリアしていますが、地震で水道管が破裂したりして断水すると使えません。中心部の貯水槽が少ないので、適当な間隔に整備することが必要です。

—— 隊員の訓練現場はなかなか見る機会はありませんが、普段はどんな訓練をしていますか

岡 建物火災が発生した場合は、まず消火することが第1の基本ですから、特に高層建築物の上階から出火した際、ホースを速やかに伸ばす方法、マンションの3、4階から出火した際、どうやって登るかなど、様々なケースを想定して訓練を行っています。また、河川水を利用するため、河川から火災現場に届くよう消防車を等間隔に並べ、ホースをつなげる訓練も行っています。

救助にもいろいろなケースがありますが、現実にも多いのは交通事故で車から負傷者を救助するケースです。特に最近の交通事故では、車の構造上の問題だと思いますが、必ず中に挟まって身体の痛みかたがひどいですね。

—— 先般、旧厚生病院の解体現場で救助訓練を行いました。これも阪神大震災の教訓を生かそうということですか

岡 それもありますが、最近では建物の構造なり災害の規模も変わってきていますので、解体する建物があれば、所有者のご協力によりいろいろな実験に取り組んでいます。旧厚生病院では、壁に削岩機で穴をあけて内部の負傷者を救助する訓練を行

いました。しかし、削岩機で穴をあけるといっても壁の厚さはかなりのものですから、時間も相当かかるものです。その他、入り口のドアをいち早く破壊するにはどんな方法がいいか、など機会を見て日頃の訓練が欠かせません。

消防訓練の目的には体力の練成という一面もありますが、救助器具の使用法一つとっても日頃の訓練を通して体で覚えておかないと、いざという時に災害現場で役に立ちません。

今後も解体を予定している建物などを利用して、様々な訓練を企画し、実施する考えです。

—— 札幌も過去には震度6の地震が発生していますが

岡 かなり古い記録なので、その点については正確さに疑問が持たれます。現在、札幌は震度5を想定していろいろな対策を講じています。札幌の下を活断層が走っているとは聞いていませんが、これを機会に札幌にどれだけの危険性があるのかきちんと調査を行い、防災計画の見直



▲阪神大震災の現場で救出作業にあたる札幌市消防局員

しを進めていくことにしております。

—— 想定震度をランクアップするのはですか

岡 昭和57年の調査では「5」で十分との判断でしたが、それから年数も経過しており、まずは専門家にきちんと調査していただくことが先決です。

—— 非常時の場合の防災責任者や、作業にあたる隊員の精神的重圧はかなりのようですね

岡 危険と背中合わせの仕事ですし、消防の場合は、常に24時間体制ですから、四六時中気が休まらず、精神的にボロボロになります。たとえ休日とはいえ娯楽やレジャーとも無縁で、酒に酔っているわけにもいきません。しかし、被害を最小限に食い止めることができた時の充実感は素晴らしく、これは経験した者にしか分からないものです。



岡 明男 おか・あきお
昭和11年2月23日生、札幌市出身、札幌南卒。26年10月入庁・札幌市消防署配属、53年東消防署副署長、57年中央消防署副署長、60年白石消防署副署長、60年同予防課長、61年南消防署長、平成元年白石消防署長、平成3年7月消防局予防部長、5年10月現職（消防局次長）。